耳下腺に発生した基底細胞腺腫の1例

山崎 裕・種田知格・野谷健一
福田 博・飯塚 正*・雨宮 璋*

A case of basal cell adenoma of the parotid gland

Yutaka YAMAZAKI・Tomonori TANEDA・Ken-ichi NOTANI

Hiroshi FUKUDA・Tadashi IZUKA*・Akira AMEMIYA*

Abstract: We report a case of basal cell adenoma of the parotid gland, which is a comparatively rare salivary gland tumor. A 68-year-old woman visited our department complaining of swelling in the right parotid region. The tumor was excised under the diagnosis of a parotid gland tumor. The tumor was located in the superficial lobe of the parotid gland and was surrounded by a fibrous capsule. Histopathologically, the tumor was mainly composed of isomorphic basaloid cells forming solid irregular trabecular structures with occasional ductal or cystic formations. Generally, the stroma was poor and contained no chondroid or mucoid components similar to pleomorphic adenomas.

Key words: basal cell adenoma (基底細胞腺腫), salivary gland tumors (唾液腺腫瘍), parotid gland (耳下腺)

緒 言

基底細胞腺腫は、単一な基底細胞様の上皮細胞の増殖からなり、明瞭な基底膜様構造を有し、多形性腺腫にみられるような粘液腫様成分を欠く腫瘍である。今回、著者らは右耳下腺に発生した本腫瘍の1例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者：68歳 女性。

初 診：平成4年8月■日。

主 訴：右耳下腺部の腫脹。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：平成3年7月頃より右耳下腺部の腫脹を自覚

したが、疼痛など他に症状がないため放置した。しかし、その後1年経過しても腫脹の縮小傾向が認められなため、平成4年8月■日当科を受診した。

現 症：体格、栄養状態ともに良好で、全身所見に特記すべき事項は認められなかった。顔貌は左右非対称で、右耳下腺部に瀰漫性の腫脹が認められた。触診では周囲組織との境界が比較的明瞭で、40×35mm大の半球状腫瘍が触れ、同部は弾性やや硬、表面平滑で皮膚および周囲組織との癒着はなく、圧痛は認められなかった(写真1)。頸部リンパ節の腫脹、顔面神経麻痺は認められなかった。また、口腔内には特に異常所見は認められなかった。

超音波検査所見：右耳下腺深部に境界明瞭で内部均一な、類円形の低エコー像が認められた。

X線所見：CT では、外頸動脈、下顎後静脈の内側に位置し、耳下腺を外側に圧排するほぼ均一の造影効果を示す境界明瞭な類円形像を認めた(写真2)。右耳下腺造影所見では、末梢導管の一部に断裂像が認められたが、漏洩像は認められなかった。

MRI 所見：腫瘍は耳下腺内に存在し、耳下腺に対し、T1強調像で低信号、T2強調像で高信号を呈し、冠状断では境界明瞭な分葉状病変として認められた。

シンチグラム所見：^{99m}Tc シンチでは、右耳下腺後方の腫瘍に一致した部位に、軽度の集積の低下を認めた。

北海道大学歯学部口腔外科学第一講座

(主任：福田 博教授)

* 北海道大学歯学部口腔病理学講座

(主任：雨宮 璋教授)

First Department of Oral Surgery, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Hiroshi Fukuda)

* Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Akira Amemiya)

受付日：平成5年3月18日

写真 1 初診時顔貌

写真 2 CT 像

写真 3 摘出物写真

^{67}Ga シンチでは、腫瘍に一致した部位に hot spot が認められた。

臨床診断：右耳下腺腫瘍。

処置および経過：術前検査より良性腫瘍が疑われたが悪性腫瘍も否定できず、術中迅速病理組織検査にて確認することにし、平成4年9月■日、腫瘍摘出術を施行した。耳下腺下極で胸鎖乳突筋前縁から耳下腺浅葉内面を剥離、挙上したところ、浅葉下面に暗赤色の被膜に覆われた腫瘍を認めた。その一部を切除し凍結標本とした。この際、透明な漿液性の内容物の流失を認めた。凍結標本では多形性腺腫が疑われたため、腫瘍を被膜の外側で耳下腺より剥離し摘出した。腫瘍と周囲組織との癒着は認められなかった。また術中、顔面神経は露出しなかつ

写真 4 病理組織像 (H-E 染色)

写真 5 病理組織像 (H-E 染色)

写真 6 病理組織像 (PAS 染色)

た。術後の経過は良好で、顔面神経の麻痺症状も認められず、外来で経過観察中である。

摘出物所見：摘出物は、線維性被膜に覆われ、表面平滑、弾性軟で $35 \times 28 \times 25 \text{ mm}$ の八つ頭状を呈していた(写真3)。断面は黄白色、充実性であった。

摘出物病理組織所見：腫瘍は周囲を菲薄な線維性結合組織により被包され、主として充実性の不規則な索を形成して増殖している上皮性組織よりなっていた(写真4)。腫瘍実質は全般に間質に接して規則的に配列しているやや丈の高い円柱状の細胞と、その内方の多角形ないし紡錘型の細胞よりなっており(写真5)、腫瘍実質と間質との間には PAS 陽性の明瞭な基底膜様構造が認められた。このような腫瘍細胞には異型性や分裂像はほとんど認められなかった。腫瘍細胞は、一部で内部に好酸性の粘液様物質を容れた大小の導管様ないし囊胞状構

造を形成する傾向を示しており(写真6), また, 一部には扁平上皮化生を示している領域なども認められた。間質成分は全般に少なく, 一部で硝子化の傾向を示すやや緻密な線維性結合組織よりなっていたが, 軟骨様ないし粘液腫様の变化を示す領域は認められなかった。

病理組織学的診断: 基底細胞腺腫。

考 察

基底細胞腺腫は多形性腺腫のもつ組織学的構造と異なる腫瘍として近年独立して分類され, 1972年のWHO分類¹⁾では単形性腺腫のなかの, その他の腫瘍群に分類され腺管型, 索状型, 胞巣型, 明細胞型などととも, その亜型に細分類されていた。しかしその後, これらの亜型群はそれぞれが独立した疾患ではなく, それらの組織像は混在していることが多く, 基本型は基底細胞腺腫であり, 他はそのvariantであるとする報告²⁾や, 他のさまざまな分類法が報告され, 混乱が生じていた。1991年のWHO新分類³⁾では多形性腺腫に対する単形性腺腫の大別はなくなり, 基底細胞腺腫は多形性腺腫と対等の位置に分類され, また, 以前の亜型群は基底細胞腺腫に含まれた。

本腫瘍の発生部位としては, 大唾液腺では耳下腺が圧倒的に多く, 小唾液腺では上唇に多いとされている。臨床病理学的事項を多形性腺腫と比較すると, 性別では多形性腺腫と同様に女性に多く, 好発年齢は60歳代と多形性腺腫より高い傾向がある。腫瘍の大きさは多形性腺腫に比べ一般に小さいといわれ, 3 cm以下のものが大部分を占めている。発生の左右差はなく, 両側に発生した症例は本邦では2例^{4,5)}が報告されているのみである。

基底細胞腺腫に特徴的な臨床所見はないが65%に嚢胞形成を認めた⁶⁾とする報告があり, 術前診断の際には念頭に置いておくべきであろう。石井ら⁷⁾は腫瘍の内部構造がCTでは均一であったにもかかわらず, 超音波検査で内部に径10 mmの嚢胞を認めた症例を報告している。本症例では術前の画像診断で, 嚢胞形成を示唆する所見は得られなかったが, 術中生検の際, 透明な漿液性の内容物を認めた。摘出物は断面では肉眼的に黄白色の充実性の腫瘍として認められたが, 組織学的には腫瘍の一部

に嚢胞形成を認めた。

本症例は現病歴より, 患者が腫脹を初めて自覚してから当科初診までの1年間に大きさに変化がみられなかったことや, 超音波, CT, MRI所見などから良性腫瘍が疑われた。また分葉状の形態を呈することや^{99m}Tcシンチグラムにおいて集積の低下を認めたことなどから, 臨床的には多形性腺腫が疑われた。しかし, 唾影像所見での断裂像や⁶⁷Gaシンチグラム所見におけるhot spotより悪性腫瘍も否定できなかった。そこで, 術中迅速病理組織検査を行ったところ多形性腺腫が疑われたが, 術後の摘出標本から, 最終的には基底細胞腺腫と診断された。

結 語

耳下腺に発生した比較的小な唾液腺腫瘍である基底細胞腺腫の1例を経験したのでその概要を報告した。

引用文献

- 1) Thackray, A.C. and Sobin, L.H.: Histological typing of salivary gland tumours. International histological classification of tumours. No. 7, WHO, Geneva, 1972.
- 2) Nagao, K., Matsuzaki, O., et al.: Histopathologic studies of basal cell adenoma of the parotid gland. Cancer 50: 736-745 1982.
- 3) Seifert, G., Sobin, L.H., et al.: Histological typing of salivary gland tumours. In the series of international histological classification of tumours. 2nd Ed, Springer-Verlag, Berlin, 1991, p 9-38.
- 4) 加藤高行, 内藤準哉, 他: 両側耳下腺に原発した Basal cell adenoma の1例. 癌の臨床 29: 147-151 1983.
- 5) 黒野祐一, 藤吉達也, 他: 両側性耳下腺腫瘍. 耳鼻臨床 77: 423-428 1984.
- 6) 長尾孝一: 唾液腺腫瘍の鑑別診断 (3). 病理と臨床 5: 197-203 1987.
- 7) 石井純一, 倉林 亨, 他: 耳下腺腫瘍における画像診断の評価. 日口外誌 38: 297-304 1992.